別添

九州ありあけ故郷（ひのくに）の風景
～雲仙岳百景Ⅱ～
フォトコンテスト　参考資料

古事記をはじめとする古代の書物には、有明海沿岸に“ひのくに（火の国、肥の国）”があったことが記されています。その“火”の由来は諸説ありますが、有明海や八代海の不知火の火とも、阿蘇山や雲仙岳の火山の火とも言われており、火の国　⇒　肥の国　⇒　肥前国（長崎県＋佐賀県）・肥後国（熊本県＋鹿児島県長島町）と変遷しました。現在、“火の国”と言えば熊本県がイメージされやすいと思いますが、実はもともと有明海沿岸のほとんどの区域を指していました。この火の国（＋筑後国：福岡県）では、古代から宝の海・有明海で漁業が営まれ、かつての漁師さんは雲仙岳の見え方（方角ごとに異なる山の形状）で漁船の位置を把握したり、雲仙岳の雲のかかり方を見て天気を予想したりしていたとも言われています。有明海と雲仙岳のセットの風景は、火の国の“故郷の風景”と言えるでしょう。

●は、ラムサール条約湿地に登録された有明海の干潟です。左から、肥前鹿島干潟、東よか干潟、荒尾干潟です。

●今回募集する３つのサブテーマのイメージは、以下の通りです。

サブテーマ①　干潟・平野と雲仙岳

佐賀県・福岡県の干潟や平野を前景、雲仙岳を後景とする作品を募集。
干潟の生物多様性の豊かさや魅力が伝わる写真、平野の水田や掘割（クリーク）など、地域ならではの風物が前景に配置されていれば OK です。航空機からの写真、祭礼時の写真なども歓迎します。

イメージ写真

有明佐賀空港から

太良町道の駅から

大牟田延命公園から

サブテーマ②　阿蘇山と雲仙岳

阿蘇山と雲仙岳を写した１枚の写真 or 両山を同じ場所で別々に写したペア写真を募集。
航空機からは、両山を同時に撮影することが可能です。地上で両山が同時に撮影可能なエリアは限られますが、阿蘇山・雲仙岳が（別の方角に）眺望できるスポットは多くありますので、探索してみてください。場所によっては、有明海の干潟も写しこむことが可能です。

イメージ写真

阿蘇中岳火口付近から（※現在は立入規制中）

阿蘇草千里の展望スポットから（雲仙岳と阿蘇山のペア）

サブテーマ③　天草諸島と雲仙岳

平成 26 年に国立公園指定 80 周年を迎えた雲仙岳と天草諸島（長島含む）を写した１枚の写真を募集。
雲仙岳・天草諸島が同時に撮影され、雲仙天草国立公園の魅力 PR につながるような写真が対象です。航空機からの写真、祭礼時の写真なども歓迎です。（国立公園区域に限定されませんが、雲仙・天草両方の国立公園区域が含まれている写真は歓迎します。）

イメージ写真

天草空港から

長島町行人岳から

＜参考１＞　富士山と雲仙岳　～意外な共通点～

平成 25 年に世界文化遺産に登録された富士山は、富士箱根伊豆国立公園に指定され、国指定文化財の特別名勝（めいしょう）にも指定されていますが、富士山のほかに国立公園と特別名勝の両方に指定されている日本の山は、実は雲仙岳のみです。

富士山と雲仙岳の共通点としては、周辺の４以上の県から立派な山体全体を鑑賞できること、霊峰として古くから崇拝され、山麓地域を越えて広い地域の方々の精神的支柱となってきたこと、有史以降も活発な噴火活動を繰り返してきていることが挙げられ、これら全てを満たす火山は国内でもまれです。

江戸時代の世界的な浮世絵師・葛飾北斎（かつしかほくさい）は、富士山に魅了され、当時の風物や人々の営みを交えて富士山を様々な方角から描いた作品集「冨嶽三十六景」や「富嶽百景」を発表しました。今回はそれになぞらえ、応募作品を基に観光 PR 用電子写真集「雲仙岳百景」を作成することにしました。

海上の不二（富士）

田面の不二（富士）

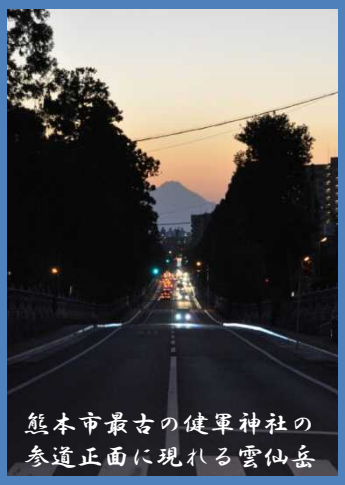
七橋一覧の不二（富士）

葛飾北斎　富嶽百景（芸艸堂）より転載

＜参考２＞　阿蘇山と雲仙岳　～阿・雲の呼吸～

現代、阿蘇山と雲仙岳のつながりが話題とされることはほとんどありませんが、実は古代には並々ならぬ深い関係があったことが神社仏閣の配置から読み取れます。雲仙岳・金峰山・阿蘇山（高岳）は同じ火山帯に属し、東西にほぼ一直線上に並んでいますが、そのラインを軸に雲仙岳と阿蘇山を大三角形で結ぶような配置で、古代創建の神社仏閣が並んでいます。これは、有明海の東西にまたがる古代の肥（火）の国において、西（肥前）にそびえる雲仙岳と東（肥後）にそびえる阿蘇山が２大火山として重要視され、両山の位置関係をベースに国づくりが進められていったことを示唆しています。

自然のライン（地学的に形成されたジオライン）
人為的なライン（神社仏閣の配置で形成されたライン）


熊本市最古の健軍神社の参道正面に現れる雲仙岳

時代をもっとさかのぼれば、雲仙岳と阿蘇山のさらなるつながりが見えてきます。雲仙岳と阿蘇山にはさまれた有明海には、現在、日本一の面積を誇る広大な干潟が広がっていますが、これは大量の土砂を運び込む多くの流入河川、波静かな奥の深い入江などの条件が整っているためです。

有明海沿岸には筑後川や白川をはじめとする多くの一級河川が流れ込みますが、実は、約 30 万～９万年前に阿蘇山が巨大噴火した際に九州北部全体をカバーした噴出物を運び込んでいるのです。

その大量の土砂がなぜ外洋に流れ出さないかと言えば、雲仙岳・島原半島が存在するためです。もしも約 50 万年前に雲仙岳が活動を開始せず、小さな火山島のままで島原半島になっていなかったなら、外洋の波が直接有明海に打ち寄せて、大量の土砂が外洋に流れ出したことでしょう。

有明海の広大な干潟は、阿蘇山と雲仙岳の“阿・雲の呼吸”とも言うべきコラボによって成立しているのです。